

ゼミ選考時の学業成績とゼミでの成績の関連性

01007324 近畿大学 大村雄史 OHMURA Takeshi

1. はじめに

大学入試の時の成績と大学入学後の成績の分析についてはいろいろ研究されているが[1]、入試時の受験科目の違いや、入学後の履修科目の違い、履修科目数の違い等をどのように評価するかという難しい問題があり、一般的な結論を導くことはなかなか難しい。

これは多くの違った性格を持つデータを一緒にして分析しているのであるから当然といえば当然の結果である。ここでは、もっと的を絞り、ゼミ選考時の学業成績とゼミの成績に注目してみる。

筆者の学部では、専門のゼミは3・4年の2年間であるが、ゼミの学生が卒業するときのゼミの成績と、ゼミの選考時の成績の間には何らかの関連性があるように思われたため、分析を行った。常識的な考えでは、ゼミの選考時に成績の良いものは多分卒業時にも所属するゼミの成績は良いのではないかと考えられるのであるが、それが正しいと言えるかどうかをデータで検証したものである。ここでは、ゼミ選考時の成績の指標として、各学生の履修科目の平均点を取り上げた。その結果、各学生の履修科目の平均点と卒業時のゼミの成績とは関連があることが分かった。

2. 分析の対象

一般的にゼミの選考時の成績とゼミの成績の間の関連性を調べようとするれば、全てのゼミのデータが必要となる。しかし、仮にそのようなことをしても

- ①ゼミにより選考の方法が異なる。 ②ゼミにより成績評価の方法が異なる。
③ゼミにより求められる素養が異なる。 ④ゼミにより運営の方法が異なる。

というような理由により、異質のデータをまとめて分析することになる可能性が強く、意味のない分析をすることになる可能性がある。従って本論文では、筆者のゼミの学生のデータを用いることにする。

3. ゼミの選考と選考時の成績

3.1 ゼミ選考の目的

指導する立場では、ゼミのテーマに興味があり、研究するのに必要な素養を持ち、かつ、各ゼミのテーマについて勉学の意欲のある学生を取りたいと考えている。また、指導するのに適切な人数というのも存在するため、選考が必要となる。

3.2 ゼミ選考の特徴

各ゼミのテーマは広い範囲にまたがっており、指導教員により指導方針や運営方法も異なるので、それぞれのゼミに適合する学生は異なると考えられる。また、選考方法もそれに適合する方法がとられていると考えられる。

3.3 ゼミ選考の方法

新ゼミ生を決定する方法は、担当者によりいろいろである。筆者のゼミでは、新ゼミ生選考時において、面接と成績で総合的に判断し、上記の目的に適合すると思われる学生を合格者としている。

3.4 選考時に得られる変数

ゼミ選考時に参照できるデータは、面接のデータと成績のデータである。ここでは面接で得られるデータについてはひとまず置いておき、成績データのみに着目する。

成績データは、応募学生の科目毎の優、良、可、不可、不受という結果だけが得られる。

3.5 選考時に得られる成績データの特徴

ゼミの選考は1次・2次・3次とあり、2次は1次の選考にもれた学生、3次は1次と2次の選考にもれたか、あるいは、新しく3年に編入・転部してきた学生を対象としている。1次及び2次の選考は2年の後期にあるため、成績は1年次のみしかなく、3次選考の場合は、1次2次に決まらなかった学生については2年までの成績が分かることになる。

従って、ゼミ選考時の成績で学生を評価するときには、ベースとなる期間が違い履修科目数が異

なるので、取得単位数や優・良・可の科目数は使えない。また、3次選考で、編入の学生である場合は、前の学校の履修科目の体系が当学部と違うため、単位の認定のみとなり具体的な成績は分からないことになる。

3.6 どのような変数を考慮の対象とするか

このような場合に使うことが出来る変数は、各種の比率の数値や、いわゆる履修科目の平均点がある。ここでは学生個人の履修科目の平均点を考える事にする。

4. 卒業時のゼミの成績とは

ゼミの成績の付け方は担当者によりいろいろであろうが、筆者は、基本的には出席点と卒業論文の成績で決定している。従って、仮に卒論が良いものであってもゼミの出席が悪ければ良い点はない。(現実には、そのような事はほとんどあり得ない。)

データを分析するに当たって、年度が違えば授業日数が異なるため、単に出席(遅刻、欠席)日数では比較できない。授業日数の違いを補正するため、それぞれの日数を各年のゼミの授業日数で割った比率を用いることにする。

各学年でのゼミの出席点は、各学年の出席率と遅刻率の一次式とする。また、ゼミの成績は、3年次の出席点、4年次の出席点、卒業論文の成績、それ以外の加点要因の点数の一次式とする。

5. ゼミ選考時の各学生の履修科目の平均点とゼミにおける成績の変数との関連

ゼミ選考時の各学生の履修科目の平均点とゼミにおける成績の変数(3年次の出席率、3年次の遅刻率、3年次の欠席率、3年次の出席点、4年次の出席率、4年次の遅刻率、4年次の欠席率、4年次の出席点、ゼミの成績)との関連を散布図で確認し、標本相関係数を調べた。次の表は、ゼミ選考時の履修科目の平均点とゼミの成績の標本相関係数である。

表 ゼミ選考時の履修科目の平均点とゼミの成績の標本相関係数

	3出席率	3遅刻率	3欠席率	3出席点	4出席率	4遅刻率	4欠席率	4出席点	ゼミ成績
平均点	0.38	-0.29	-0.29	0.38	0.26	0.15	-0.40	0.29	0.41

標本相関係数の検定結果は($H_0: \rho = 0$)、5%有意水準では、「4年の遅刻率」以外は有意である。

6. 結論

ゼミ選考時の各学生の履修科目の平均点は、入ゼミ後のゼミの成績と関連することがデータで検証された(4年の遅刻率を除く)。但し、この結論は傾向としての話であり全ての学生がそうではない。細かく見ていくと、ゼミ選考時の履修科目の平均点が低くてもゼミの成績がよい学生もいるし、逆にゼミ選考時の履修科目の平均点が高くてもゼミの成績が悪い学生もいる。

7. 考察

(1) 4年次の遅刻率がゼミ選考時の各学生の履修科目の平均点と無相関という結論が得られたが、これは企業のセミナーや入社試験が、丁度ゼミの時間に重なっている事が影響していると考えられる。

(2) ゼミ選考時の各学生の履修科目の平均点は、4年次の遅刻率以外のゼミの成績の変数と相関があることが示されたが、特に4年次の欠席率との相関が大きく出ている(負の相関)。これは就職という心理的圧力が加かった状態でも、ゼミ選考時の履修科目の平均点の高い学生ほどそれに耐えて、出来るだけゼミを休まないようにしていることを意味していると思われる。つまり、学業成績は、就職活動で忙しくてもゼミに出られる時は出来るだけ出席しようと言う心理的な忍耐力の強さに関連する指標の一つと考えてもよいだろう。これは企業が求める必要条件の一つでもある。

参考文献

[1] 柳井晴夫, 前川眞一 編, : 「大学入試データの解析」, 現代数学社, 1999